

解説 11 女性の家事労働が減らない理由

—歴史から考える—

【課題のねらい】

「家事は女性の仕事」だという社会通念を、(その善悪は別にして)私たちは多かれ少なかれ共有しています。そして現在に至るまで、主に女性(妻)が家事労働に従事するという生活様式を取っている家庭も少なくありません。こうした社会通念や生活様式は、いつ、どのようにして誕生したのか、を経済や技術の問題として考えて欲しいと思い、本課題を設定しました。

【解説】

家事労働の歴史については、社会学やジェンダー論の分野でいくつかの研究がありますが、経済や技術の側面から分析する歴史研究は多くありません。特に、家事労働が女性に専門化されていく過程は、(日本や欧米の事例を見る限り)産業革命や工業化による人々の働き方や家族の在り方の変化と大きく関係しています。

参考図書として挙げた書籍は、「19世紀の工業化と20世紀の家庭電化は、お母さんたちの仕事を本当に楽しめたのだろうか?」という問題関心を持って、主に技術史・経済史の観点からアメリカにおける家事労働の歴史を分析したものです。日本を対象として、本書のように家事労働の時間や実態に踏み込んだ歴史研究は、まだまだ発展途上です。ですので、日本の家事労働に興味のある方も、本書から学ぶことは多いはず。例えば、工業化に伴って導入された新しい道具は、男性の家庭内での家事仕事を減らし、女性の家事仕事を増加させたという具体的な事例は興味深く、さらに、男性が外へ就業機会を求め、残された仕事に女性が従事する慣行が世代を経て固定化したという指摘など、日本との共通点として考えて良いと思います。

一方で、本書の事例や指摘が日本の家事労働の歴史には、直接当てはまらないことも多いと思います。この点については、ぜひ、大学でのこれからの学修活動においてみなさん自身で取り組んで欲しいと思います。もし日本の家事労働の歴史についてさらに知りたいと思った方には、アンドルー・ゴードン著/高橋かおり訳『ミシンと日本の近代：消費者の創出』みすず書房、2013年や谷本雅之「日常生活における家事労働の役割：もう一つの消費史として」(ペネロピ・フランク、ジャネット・ハンター編/中村尚史、谷本 雅之監訳『歴史のなかの消費者：日本における消費と暮らし1850-2000』法政大学出版局、2016年)などが興味深い事実を教えてくれるかもしれません。